



2022年度「地域課題の解決に向けた多様な主体による連携・協働促進会議」報告書

四角をま～るく！ 連携・協働のための 地域円卓会議



目次

I 地域円卓会議研修の概要	1
II 地域円卓会議について	3
III 各回の報告	
第1回 連携・協働のためのコーディネーターの心得	4
第2回 地域円卓会議の成果を生む参加者の組み合わせ・調整	7
第3回 現場見学:岡崎市/松應寺横丁・籠田公園(QURUWAの拠点)	10
第4回 地域円卓会議の場づくり、連携・協働の関係づくりの支援	11
第5回 連携・協働を阻むもの、それを克服するための担当者の役割	14
IV まとめ	17

I 地域円卓会議研修の概要

1 地域円卓会議研修について

多様化・複雑化する地域課題を解決するためには、NPOと行政だけでなく、大学、企業、地域など、多様な主体がそれぞれの特長を生かし、連携・協働することが求められている。これに対し、行政や市民活動センターは、多様な主体が集まり、地域課題の解決に向けて協議する場（地域円卓会議）を設計・運営する役割が期待されている。本研修は、そのノウハウや手順を学ぶもので、今年度は、「小規模地域での地域交流」と「地縁組織との関わり・つながり」をテーマとし、全5回で開催した。

2 地域円卓会議研修の参加者

区分	氏名	所属
ファシリテーター	池田 哲也	一般社団法人地域問題研究所 事業部長
NPO	小林 照美	NPO法人かたひらかたろう 理事長
	長尾 晴香	一般社団法人ViVarsity 代表理事
	山下 祐司	NPO法人コネクトスポット 理事長
大学	大脇 明子	名古屋経済大学地域連携センター 統括主査
	菊池 遼	日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科 助教
企業	鈴村 萌芽	株式会社musbun 代表
行政	勝川 英里子	とよた市民活動センター 主事
	河合 めぐみ	豊田市松平支所 主任主査
	齋藤 雅治	名古屋市市民活動推進センター 推進員
	谷口 美紀生	扶桑町住民活動支援センター（ぷらねっと扶桑 理事）
	内藤 佑佳	刈谷市市民活動部市民協働課 主事
	中村 晋一	岡崎市役所市民協働推進課 主任主査
	森 智史	知多市市民協働課 統括主任

（敬称略）

3 地域円卓会議研修の経過

回	日時・場所	内容	
第1回	9/6(火) 13:30-17:00 あいちNPO 交流プラザ	テーマ	連携・協働のためのコーディネーターの心得
		第1部	講演:課題解決につながる連携・協働とは?地域円卓会議とは? 講師:高平 亮氏(NPO法人岡山NPOセンター 事業部長、ESD・市民協働推進センター センター長)
		第2部	話題提起:連携・協働のためのコーディネーターの心得 話題提起者:大脇 明子氏
			グループワーク:コーディネーターとして、ネックになっていること
第2回	10/4(火) 13:30-16:30 あいちNPO 交流プラザ	テーマ	地域円卓会議の成果を生む参加者の組み合わせ・調整
		第1部	話題提起①:福祉とまちづくりをどう組み合わせるか 話題提起者:山下 祐司氏
			話題提起②:福祉と学生をどう組み合わせるか 話題提起者:鈴木 萌芽氏
		第2部	講義:多様な主体の連携・協働によるイノベーションとレジリエンス 講師:菊池 遼氏
グループワーク:地域円卓会議の参加者の選定・組み合わせ			
第3回	11/18(金) 10:00-12:00 岡崎市内		現場見学:岡崎市/松應寺横丁・籠田公園(QURUWAの拠点) 案内人:天野 裕氏(NPO法人岡崎まち育てセンター・りた 事業企画マネージャー)
第4回	11/18(金) 13:00-16:30 愛知県西三河 総合庁舎	テーマ	地域円卓会議の場づくり、連携・協働の関係づくりの支援
		第1部	講義:松應寺横丁の地域交流から地域課題解決に至るプロセス 講師:天野 裕氏(NPO法人岡崎まち育てセンター・りた 事業企画マネージャー)
		第2部	話題提起①:多世代交流のための地縁団体を交えた話し合い 話題提起者:小林 照美氏
			話題提起②:多文化交流のための地縁団体を交えた話し合い 話題提起者:長尾 晴香氏
グループワーク:地域との関係づくり・場づくりで困っていること			
第5回	12/13(火) 13:30-17:00 スペース七番 (錦二丁目の まちづくり拠点)	テーマ	連携・協働を阻むもの、それを克服するための担当者の役割
		第1部	講義:多様な主体による連携・協働のためのコーディネーター論 講師:名畑 恵氏(NPO法人まちの縁側育み隊 代表理事、錦二丁目エリアマネジメント株式会社 代表取締役)
		第2部	地域円卓会議 実践編

4 地域円卓会議研修報告書について

この報告書は、全5回の地域円卓会議研修の内容から、多様な主体による連携・協働を促していくための地域円卓会議のあり方やまちづくりについて、講義や話題提起、グループワークで出た発言を基に、参考になるポイントをまとめたものである。

II 地域円卓会議について

1 地域円卓会議とは

地域の課題について、関係者を含む多様な主体が、対等な立場で話し合う場。対等な話し合いの蓄積によって、課題の共有や、お互いの立場や強みの理解、地域ビジョンやそれに取り組んでいくための設計を行いながら、役割分担や段取りを決めていく。縦割り化された組織や個人、資源をつなぎ、地域とそこに住む人たちとの関係をつむぎながら、みんながやる気になっていくための会議である。

地域円卓会議のメリットは、多様な主体が関わることで、複数の着眼点から、課題解決への新しい動きを生み出していくことができる。また、関係やきっかけが得られ、まちのキーパーソンが生まれる場でもある。

2 地域円卓会議の流れ



地域円卓会議の全体の流れの例。地域の課題解決や希望実現のために、多様な主体による連携・協働のニーズがスタートとなる。アセスメントによる地域の状況把握や参加者（構成員）の人選を含めた準備が、成果の重要なポイントとなる。会議の開催回数はゴールの設定次第だが、会議で話し合われた内容を、地域活動に結び付け、共有・承認されるよう促し、試行を経て、ゴールにつなげるのが望ましい。

3 地域円卓会議を企画する

- ①きちんと地域の課題に向き合い、当事者の意見に耳を傾け、取り上げる課題・希望を整理する。
- ②事前準備として、(1)事務局・コーディネーターを設定する、(2)テーマに即して、ふさわしい地域的な範囲（エリア）を決める、(3)アセスメントやリサーチによって、地域を把握する。
- ③企画として、(1)成果を踏まえたテーマを設定する、(2)会議を通じて何をしたいのか、ねらい（目的）を明確にする、(3)全体の流れ・スケジュールを立てる、(4)テーマ設定に沿って、ファシリテーター・参加者（構成員）を選定する、参加者にメリットがあることが大切、(5)必要な回数の会議を設計する。
- ④会議の過程で、成果につながるために押さえておく点は、(1)先進地見学などで、チームワークを形成する機会を持つ、(2)試行（お試しアクション）を検討する、(3)参加者でゴール（成果・目指す姿）を決める。これらを通して、参加者が「自分ごと」として関わってくれるようになるとよい。

【参考資料】

- ・愛知県「地域をつなごう！連携・協働のための円卓会議」（2021年度）
<https://www.aichi-npo.jp/2021chiikientakukaigi.pdf>
- ・愛知県「地域が変わる 地域円卓会議を開いてみよう！」（2012年度）
https://sunnyday-cfsc.ssl-lolipop.jp/00_document-1/2013_entaku.pdf

Ⅲ 各回の報告

第1回 テーマ:連携・協働のためのコーディネーターの心得

【第1部】

講演:課題解決につながる連携・協働とは?地域円卓会議とは?

講師:高平 亮氏



(NPO法人岡山NPOセンター 事業部長、ESD・市民協働推進センター センター長)

■岡山NPOセンターについて

NPOを支えるNPOということで、「支えるを支える」がスローガン。「豊かな市民社会の実現により、まちの中で起きた課題を、まち自ら解決していける持続可能で自然治癒力の高いまちの実現」がミッション。

■連携・協働について

□連携・協働とは

「目的が共有されている」、「相互理解がされている」、「対等な関係が築かれている」、「自主性が尊重されている」ことなどを押さえつつ、複数の主体が一緒に何かをすること。

□必要とされる背景

2000年以降、特に2015年～2020年にかけて、各自治体が協働に関する条例を制定し始めた。その大きな要因として考えられるのは、「人口減少・高齢化」の進行。

→人口減少・高齢化が進むと、持続「不」可能な社会に向かう。

「社会保障の持続不可能」(年金受給年齢引き上げ、医療費自己負担増など)

「相互扶助の持続不可能」(孤立化の進行、助け合いの消失など)

「生活の持続不可能」(移動や食料調達の手段、インフラの消失など)

「経済の持続不可能」(消費量や競争力の低下による生業の消失など)

「アイデンティティの持続不可能」(文化継承、史跡保全の担い手不在による消失など)

→行財政の基盤が維持できず、サービスの範囲が狭くなる、質が落ちることを防ぐため、「協働」が推進された。

□メリット

<行政にとって>

①行財政基盤の維持、②サービスの範囲・品質の維持

<市民・NPOにとって>

①活動資源が獲得できる(行政が持っているお金・場所・情報等を共有できる)

②主権者としての権利行使(市民がサービスの提供主体になる)、③信頼感や安心が増す

<社会にとって>

①公共サービスを担う主体の育成・拡大、②持続可能な新しい仕組みが生まれる可能性がある

③単一の主体ではできなかったことができるようになったり、事業の量や質、効率が向上

■連携・協働のコーディネーターについて

□5つの役割

①脚本の作成

→先行事例などをもとに課題解決の工程を示す。解決を目指す課題の構造をある程度把握したうえで、その解決のためにどういうシナリオ・脚本、具体的には事業が考えられるか。

②主体の配役

→課題解決に必要な資源を有する主体を集める。専門性を持っている主体が、自分たちの周りにどれだけいるかもコーディネーターの腕の見せどころ。知っているだけでなく、頼みごとができる関係かどうか、主体同士の相性も必要な情報。

③資源の調達

→事業に要する資源（使命・人材・資金・物品・情報）を調達する。地域外の主体の力やノウハウを借りるなど、発想を広げる。資源が多ければよいわけでもなく、最初に最適を理解していることが重要。

④場の演出

→場の雰囲気をつくる。コーディネーターが、その場の目的、何をを目指しているのかを理解し、雰囲気や流れをつくっていくことが重要。また、社会的機運を醸成する。ストーリーやインパクト、タイミングを意識していれば、うまくいくこともある。

⑤合意形成の促進

→協議を促し、整理する。よりよい合意形成に導く。合意形成の目的は、総力の結集。そのために、全員の存在を尊重する、過程や結論をわかりやすく示す、結論に対して責任や権限の偏りをなくす。

□心がまえ

①面倒なことから逃げない

→場が荒れたときに積極的に介入し、原因を整理して次に移れるように、責任を持って関わる。

②常にエンパワメント（権限移譲・能力開発）を意識する

→参加者が力をつけることを目指す。コーディネーター不在でも機能する習慣づけやルールの定着。

③課題について積極的に学ぶ

→議論を邪魔しない知識があるとよい。「この人話せるな」と信頼してもらえると、相談されやすい。

■地域円卓会議について

□岡山NPOセンターでの工程

テーマを受け付け、会議になるかを判断した後。

①目的共有…参加者同士で目的を共有。相互理解を深め、プロジェクトチームの基盤をつくる。

②構造分析…課題の現状や原因をできるだけ客観的に捉え、共通認識を持つ。解決の仮説を立てる。

③課題解決・計画策定…事業計画をつくる。参加者の「覚悟」を引き出す。

□多様な主体を巻き込むための工夫

テーマを編集する。例えば、外国人の住民トラブルでは、「不動産屋の悩み解決に力を貸して」というより、「市内在住の外国人が、日本の文化や習慣で困らないためのしくみづくり」と編集して、多様な主体が参加しやすい場を設定する。言い方を再編集し、いろいろな人の協力を得ることもテクニックの1つ。

【第2部】

話題提起:連携・協働のためのコーディネーターの心得

話題提起者:大脇 明子氏(名古屋経済大学地域連携センター 統括主査)



■連携・協働のためのコーディネーターの心得とすること

- ・情報に対するアンテナを敏感にする。いろいろな情報を入れておくと、のちにつながってくることも多い。
- ・傾聴(真摯な姿勢で相手の話を聞くコミュニケーション技法)を心がける。信頼関係の構築につながる。
- ・何を要望されているのか、どんなボランティア・イベントなのかなど、情報の聞き取りは大切。
→きちんと聞き取らないと、学生に募集もかけられない。
- ・連携・協働の会議では、「全員が当事者」と意識してもらうために、役割を付け、分担する。
- ・大学、行政、企業、地域、組織ごとにスケジュールが違うので、ざっくりとした段階から、日程調整を始める。

■連携・協働のためのコーディネーターの心得と大学職員として思うこと

- ・学生の学びになるかどうか。例えば、①受入先(地域、行政、団体)の人と直接話せるタイミングがある。
②実際の業務を体験できる。③学んでいる専門知識を生かせる。
- ・要望を聞き取り、教員・学生にとってより効率的な活動になるように、誰に・どこにつながるかを考える。
- ・お互いにリスペクトがあれば、いい事業になる。学生にも、リスペクトして参加することが大切だと伝える。
→お互いにリスペクトがないと、うまくつながらないし、継続していかない。

グループワーク:コーディネーターとして、ネックになっていること

■参加者から出た、ネックになっていること

- ・縦割り。外部的にはもちろん、内部的にも部署ごとの温度差がある。
- ・自分も相手も、連携に慣れていない。経験がないと警戒心を持たれる。
- ・参加者のお客さん化。担い手として一緒にやってほしいが、難しい。
- ・参加者のメリット。得るものがないと、なかなか参加してもらえない。
- ・部署の人員不足。自分の勉強・知識・スキル不足。
- ・会議で主張の強い人の意見に流される。「その意見は違う」と思っているけど、黙っている人を見抜けない。



■ネックになっていることに対するアイデア

- ・連携・協働から生まれる価値や可能性を知らない人とは、一緒にやってみるのが近道。
- ・コーディネーターは上手である必要はない。上手にやると参加者をお客さん化してしまう可能性がある。
→できないコーディネーターの方が、参加者が自ずと主体的になる場合も。みんなの関わりしろをつくる。
- ・人数が多いと待ちが多くなってしまいますので、小さいグループで話して、それを報告する方法も。

【第1回の学び ~参加者アンケートを元に~】

- ・地域円卓会議の基盤となるのは、「目的共有」と「参加者の役割」。
- ・連携・協働相手と信頼関係を築いて、ちゃんとwin-winな関係をつくる。
→例えば、学生は地域に出ることで学びになり、受け入れた地域も学生の視点から気づきを得られる。
- ・お互いにリスペクトする。その人が何かの資源を持っているはずという前提で、関わるのが大切。

第2回 テーマ:地域円卓会議の成果を生む参加者の組み合わせ・調整

【第1部】

話題提起①:福祉とまちづくりをどう組み合わせるか

～みんなが“いきやすい”地域を、みんなと共同でつくる～

話題提起者:山下 祐司氏(NPO法人コネクトスポット 理事長)



コネクトスポットのビジョンは、「誰もがその人らしく共に生きる地域の実現」。いわゆる、地域共生社会。色や形、みんな違う。自分らしくつながればいい。そのための地域円卓会議の事例を2つ紹介する。

生きづらさを考えるきっかけ、まちの人に、生きづらさ・障がいがある人に関心を寄せてもらい、[まちづくりに巻き込みたい](#)という目的で、ビジョンを映像化することになった。参加者は、自分(シナリオ担当)、プロの撮影スタッフ、劇団の人(障がいのあるキャスト)、計3~4人で地域円卓会議をした。それぞれの立場・利害関係が違うので、こちらの意図が全然伝わらないのが大変だった。自分はプロにお願いしているので、撮影は全部お任せできると思っていたが、何を伝えたいのか、配役、ロケ地、尺など、シナリオも細かく書かないと撮れないと言われ、劇団からは宣伝になるかを問われ、その辺をうまく話し合いながら進めた。

コネクトスポットのメイン業務は、ひきこもりの人たちに、まちとのつながり(岡崎で学んだり、働いたり、遊んだり)を、どう提供していくかを専門家チームで考えながらやっている。そういう意味で、日々、地域円卓会議。全員、専門性・スキル・性別・年齢が違う中で、話が割れたり、思うようにいかないこともあるので、毎日、夕方に振り返りのミーティング(モヤモヤを共有する時間)と、週1回、事例検討会を行っている。本当にぶつかり合うときもあるが、仕事の区切りをいい形で終わりたいと思っている。

地域円卓会議で大切にしていることは、まず、[ビジョン・目的の共有](#)。参加者が、[ここにいることの意味](#)を見出せるもの考える。これまでの課題より、これからのこと、[ワクワクの方が入りとしてはよい](#)。会議のスタート時と振り返り時に触れる。次に、[フラットな関係とその人らしい役割](#)。僕は、ファシリテーションに徹して、「[集合知](#)」を出したい。一人ひとりの声を丁寧に聞く。参加してよかったと思ってほしい。議論をホワイトボードに記載するとより効果的。そして、[会議以外の時間や根回しも大切](#)。開催前には、参加する意味(メリット)を説明しながら参加を呼びかけ、参加中に思うように話せていなさそうな人には、[個別フォロー](#)する。

【第2部】

話題提起②:福祉と学生をどう組み合わせるか

話題提起者:鈴木 萌芽氏(株式会社musbun 代表)



musbunは、2021年11月設立。高齢者が多く住む地域で育ち、いつか恩返ししたいと思っていた。大学入学後に行ったボランティアで、福祉現場の人手不足を痛感し、同時に、福祉って、意外とおもしろいことに気がついた。福祉のおもしろさを同世代に伝えていくことで、人材不足の解消に貢献したい。

事業は、福祉体験のマッチングのプラットフォームの運営。福祉の仕事は、大変、給料が少ないなど、悪いイメージがあり、それがもったいない。福祉の魅力を知るきっかけを増やすため、手軽に福祉体験ができるプラットフォームをつくった。強みは、学生目線で、学生向けのサービスをつくること。募集の詳細や施設の特長はもちろん、周辺のお店情報も載せ、学生が安心して福祉体験に行ける工夫も。また、併設カフェのメニュー開発やレクリエーション企画など、福祉を前面に出し過ぎず、楽しい募集を多く掲載している。

最初の1年は一人で走り続けた。その後、ビジネスコンテストに参加したり、学校で話す機会をもらい、そ

れらを聞いて興味を持った学生が参加し、仲間が増えた。今は、13人で活動中。学年も学部も幅広い。月1回、社内ミーティングを実施。学年、年齢、入ったタイミングは重視せず、みんなが意見・本音を言える環境を大切にしている。活発に意見も出て、企画で出たことは実現したいので、まずやってみる。

講義:多様な主体の連携・協働によるイノベーションとレジリエンス

講師:菊池 遼氏(日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科 助教)



■多様性とイノベーション

～多様な主体の連携・協働によって、ネットワークで集合知を導き出し、イノベーションを地域に～
イノベーションというと技術革新などを想像する人も多いかもしれないが、ちょっとしたことを変えてみたりするだけで、地域にとってはイノベーション。ちょっと変わったことをやる勇氣を持ってほしい。

・マシュー・サイド『多様性の科学』

「個人知から集合知への転換は、人類の歴史における主要な進化の一つであり、多様なアイデアの交配による融合のイノベーションは、人類史の変革を促してきた」

・連携・協働の本質:集合知を生み出す

→一人の考えよりも、いろいろな人が集まって、導き出した考えの方が正しいというのが、多くの研究結果から出ている。だから、NPOだけではなく、いろいろな人が集まってやるのがポイント。

・なるべくフラットな関係を築く

→多様性があるだけでは不十分で、一人のリーダーに権威性が帯びてはいけない。権威性のある人がOKを出すと、付いていってしまう。リーダーは少し下がったり、参加者の話を聞く姿勢が求められる。

・専門家の知見よりも、集合知の方が優秀

→新しい知を生み出すとき、専門家が集まって出した回答よりも、専門家と素人が一緒に考えたアイデアの方がいいという研究結果がある。議論の收拾がつかなくなると思うかもしれないが、議論がまとまらないときの方が高いパフォーマンスが出る。話がすぐにまとまる議論は、あまりいいアイデアではない。

・最近のイノベーションの主流は、ネットワーク展開型

→異なる分野の人たちがつながることで、イノベーションが生まれる。鈴村氏の事例は、鈴村氏が福祉の出身ではないからこそ生まれたイノベーション。だから、福祉が専門ではない人たちも、集まりやすい。

・弱いつながりの強み

→弱いつながりは、多様性のある関係ができやすい。より広い協調関係が生まれ、新しい情報が入ってくる。そうすると、イノベーションが起こる。また、弱いつながりであればあるほど、創造性が増す。自分にとっての常識が、他の人にとっての常識とは限らないので、いろいろな常識を組み合わせることで、新しい知が生まれる。ただし、「いいよね」で終わる場合もあり、実行していくには、強いつながりが必要。

■危機の時代とレジリエンス

～社会の不確実性が高まる中で、急速な変化に対応するため、レジリエンスで乗り越えよう～
不確実性が増す社会の中で、変化に対応するためには、組織・リーダーにとって、適応力・柔軟性が大切になり、弱いつながりを持って、パートナーシップを組む。

・レジリエンス(回復力・復元力)

→困難で、驚異的な状況にもかかわらず、未知の環境変化に迅速に順応して、回復する能力。

・ゼロリスクより、レジリエンス

→いろいろな危機があり、社会が受けたダメージに対して、どう回復していくかは、柔軟性を持つこと。どれだけ対応していても、それを上回る何かやってくる。だから、対応できる力を身に付けておく。

■組織は柔軟になれるのか？

～統制された組織よりも、変化に柔軟に対応できる組織が、これからの時代に生き残る～

行政の縦割りをどう解消できるかも、1つの課題である。しかも、縦割りを超えた上で、地域のステークホルダーとも連携・協働しなくてはいけない。

・マトリックス組織

→縦と横の2つの軸によって、格子状協働体系を状态的に形成・維持する組織形態。つまり、縦割りを超えるには、横ぐしを刺した方がよいというもの。管理コストが高く、日本では定着しなかったが、メリットは、異分野のコミュニケーションが促進される。まさに、イノベーションであり、どういろいろな壁を乗り越えていくかが、新しいアイデアの創造につながる。また、流動性・多様性が増す市場への対応性も高い。

・ティール(進化型)組織

→ネットワークに中心はなく、みんなが自立分散的に関わり、課題に取り組んでいく組織形態。ポイントは、「そっちの方がいいよね」「おもしろいよね」という価値観。先入観なしに、直感で動く。過去の成功体験は邪魔したりするので、引っ張られず新しいものを生んでいく。地域円卓会議は、まさにティール組織。

■コラム:「地域を動かす」ためのヒント

～地域に住む人々の属性に合わせて、客観的な指標を取り入れつつ、ワクワクを生み出す～

第1回講演のポイント、コーディネーターの役割:「脚本の作成」を分析

①ストーリーテリング(物語をつくる)

- ▶地域課題の共有
- ▶課題解決までの目標の提示
- ▶統計データをもとにした見える化⇒「社会不確実性」の認識

②キャストイング(主体の配役)

- ▶地域の主体を把握する
- ▶地域資源を活用する⇒「地域カルテ」の活用
- ▶ネットワークをつくる
- ▶縦割りを超えて巻き込む⇒「多様性」の確保

③ディレクション(演出)

- ▶ワークショップの実施
- ▶合意形成の場づくり
- ▶既存の価値観に捉われない⇒「イノベーション」「ワクワク」の創出

【第2回の学び ～参加者アンケートを元に～】

- ・会議前の根回しだけではなく、会議後の個別フォローが大切。
- ・多様性、フラットな関係、水平的コミュニケーションが大切。
- ・“なぜ(ビジョン)”を示す。なぜを示さないと、人は動かない。
- ・多様な主体が関わることによって、当初描いていたことより、こっちの方がおもしろいと思ったら、変えていく柔軟性、即興性が大切。
- ・既存の会議のやり方から、いかに脱却できるか。ワクワクする話は、インフォーマルな(形式ばらない)場の方が出やすい。地域円卓会議はフォーマルな(形式的な)場になりやすいので、どうおもしろくするか。



第3回 現場見学:岡崎市／松應寺横丁・籠田公園(QURUWAの拠点)

案内人:天野 裕氏(NPO法人岡崎まち育てセンター・りた 事業企画マネージャー)

●松應寺横丁

松應寺横丁は、岡崎市松本町にある、松應寺の中にあるまち。江戸時代は門前町、明治後期から昭和中期頃までは、花街として栄えた。戦後、境内に木造の商店街が建てられたが、半数以上が空き家・空き店舗となり、老朽化が進んでいたが、2011年から、[地域の活性化](#)と[課題解決](#)を目的に、様々な人々の連携・協働により、まちづくりをやっている。2018年には、松應寺横丁の店舗店主がまちづくりに加わり、商店街組織が組成され、[にぎわい創出](#)に取り組んでいる。近年、新規で、商店街組織ができるのは珍しい。

見学した松應寺横丁は、寺の土地で、道幅が狭く、建物の建て替えができないということで、戦後に建てられたままの姿が残っており、[非日常](#)を味わえる。リフォームは大変とのことだが、まちにとって、[貴重な資源](#)である。また、松應寺横丁に関わっている人々の、[まちへの誇り](#)と[楽しんでいる様子](#)を見ることができた。



●籠田公園(QURUWA(くるわ)の拠点)

2015年に始まった、岡崎市中心部の乙川リバーフロント地区のまちづくり、QURUWA戦略。公民連携のプロジェクトで、公共空間を結ぶ回遊動線QURUWA上に魅力的なコンテンツを集約し、[ウォークアブルな\(居心地がよく、歩きたくなる\)まちづくり](#)を目的としている。籠田公園はその拠点である。2019年にリニューアルされたが、市民ワークショップなど、[利用者の意思を反映して、計画](#)された。見学時には、多くの市民が、籠田公園を気持ちよく利用している様子を見ることができた。また、回遊動線を整備したことで人通りが増えたり、桜城橋のぞうきんがけボランティアなど、[市民が積極的に保全にも関わる](#)ようになったという。

さらに、QURUWA戦略の最近の動きとして、1町ではできないことも集まればできることもあるので、[町内会の連合体ができ、それがプラットフォーム化](#)し、情報交換の場になっていたり、30~40歳代の人たちを巻き込んだ次世代の会ができ、地域の課題解決に取り組んでいるなど、[地域に関わる人が増えている](#)。



【第3回の学び ~参加者アンケートを元に~】

- ・松應寺横丁やQURUWA戦略、話には聞いていても、[実際に見学・体感](#)すると、いろいろと勉強になる。
- ・歴史・背景・意図・こだわり・取組などを聞きながら見学できたので、改めて岡崎のまちのよさを感じた。
- ・おしゃれなデザインや心地よさなど、[過ごしやすい場所をちゃんとつくらないと、人は集まってこない](#)。

第4回 テーマ:地域円卓会議の場づくり、連携・協働の関係づくりの支援

【第1部】

講義:松應寺横丁の地域交流から地域課題解決に至るプロセス

講師:天野 裕氏(NPO法人岡崎まち育てセンター・りた 事業企画マネージャー)



●松應寺横丁のまちづくり

○まちづくりの始まり

松應寺横丁は、寺の境内、私道なので、再建築できず放置されていた。岡崎市民にもほとんど知られておらず、市の施策対象になる場所ではなかった。ただ、路地がいい。道路が人のためにあり、ウォークアブルをわざわざつくらなくても、松應寺横丁にはある。路地と空き家の雰囲気を生かしたまちづくりをしたいと思った。しかし、地元の反応は「そんなことできるわけないだろう」という感じだった。

幸運なことに、岡崎市松本町に知り合い(岡崎まち育てセンター・りたの元理事、のちに市議員)で、キーパーソンとなる人がいた。キャスティング、誰に声をかけたらいいかをリストアップして、つないでくれた。松應寺の住職も、にぎわいを取り戻したいということで、2011年から、協働のまちづくりがスタート。また、学生の視察で松應寺横丁に写真を撮りに行き、松應寺の境内で学生が見つけたこのまちのいいところの発表会をして、外から見たまちのよさを、住民に知ってもらう機会を設けた。

○全住民アンケート

松本町の全住民にアンケートを実施した。374人中、191人から回答を得た(回答率51.5%)。アンケート項目は、仮説の検証、実態とニーズの把握を意識して作成。課題だと思項目は、「少子高齢化」が78.5%、「空き家」が70%、「買い物が不便」が69.1%。そして、84%が、課題についてまちとして取り組むべきと回答した。よそ者が来て、勝手にやるのではなく、地域として取り組むべきだと、承認された。

○「松應寺横丁にぎわい市」の開催

全住民アンケートで、希望する催しの第1位が「縁日」だったので、「松應寺横丁にぎわい市」をやってみることになった。出し物をしてくれる人、お店を出してくれる人、モノづくり作家などを呼んできて、開催した。第1回が約1000人、第2回が約1500人の人が来た。第2回をやったところで、「このまちいけるかも」という機運が流れた。ただ、年に2日、1000人以上が集まっても、残りの363日は元の状態。

○松應寺横丁の空き家の活用

そこで、空き家を活用し、地域の活動拠点をつくることになった。しかし、空き家はたくさんあるが貸してもらえない、半分は所有者不明の状態だったが、メンバーの親戚所有のところを借りられることになり、2012年、1軒目の「松本なかみせ亭(飲食店)」がオープン。愛知県新しい公共支援補助金に採択され、改修費はそこから出た。にぎわい市開催時に、モノづくり作家が多くいることがわかり、小箱ショップ(作品販売できるブース)も設置。作品補充で来店し、仲良くなり、関係人口になることに役立っている。

2軒目は、妻が中古・アンティーク着物のお店を始めた。お店ができて始めると、最初は渋っていた人たちも、徐々に空き家を貸してくれるようになった。今は、15軒の空き家が活用されている。活用できるところは、ほぼ埋まっている。また、まちづくり発展会という商店街組織ができ、にぎわい創出を担っている。

○高齢化対策(松本町包括ケア会議)

2013年、まちづくりが落ち着いてきたので、高齢化対策にも取りかかることになったが、何から手を付けたらよいかわからなかったのが、高齢者のニーズ調査から始めた。共通の課題として、買い物難民化が進んでいた。そこで、見守り機能を有する会員制弁当屋を始め、週に1回、1時間だけ営業。毎週来てもらうことで、安否確認を兼ねており、異変を感じたら民生委員などに連絡する。お皿や食材の寄付など、協力の輪が広がったり、お店の前にベンチを置いたら、会員が早めに来て交流したりしている。また、「じゅげむ」という高齢者サロンが開設された。松本なかみせ亭から出前を取り、相乗効果が出ている。

■コラム:松應寺横丁の地域円卓会議的展開のここに着目!

□そもそも課題解決をしたい人って誰か?

課題解決をしたい人は多くない。実際に、課題解決をしたいのは、行政や地域外の人。

・アンケートで、課題を見える化することで、共感者を増やす。

→それによって、支持される活動をすることができるようになった。

□共感と実践の隔たりをどう埋めるか?

社会的にいいことなので、「それいいね」、「それやるべきだね」と共感者は増えても、実際に時間や労力を費やす、実践となると、そこには隔たりがある。

・関わる人の間口を広げる。にぎわい市や小箱ショップは、関わりしろをつくるには有効だった。

→小さな成功体験を積み重ねていくと、関係性がだんだん深まっていく。

・課題を解決可能なサイズに切り分ける。

→例えば、少子高齢化問題となると、何から手を付けていいかわからないが、会員制のお弁当屋とかなら、「これならできる」という人が出てくる。

□「結果、課題解決」という戦略

課題解決を目的化しない。目的にすると、そこに関心のある人が減る。楽しそうなことで間口を広げて、間接的に関わってくれる人をいかに増やすか。元々、課題をやりたい人ではないが、その人たちが活躍・協力してくれることで、課題解決につながっていく仕組み・仕掛け。

・自己実現と課題解決を間接的につなげる。

→優先順位を上げる。「やった方がよい」と頭でわかっているけども、資源がないからできない。自己実現や仕事と絡めてやらないと、実働につながっていかない。

・「困っているんだけど、手伝ってくれない?」と、頼れる関係を築く。

【第2部】

話題提起①:多世代交流のための地縁団体を交えた話し合い

話題提起者:小林 照美氏(NPO法人かたひらかたろう 理事長)



名古屋市緑区で、「赤ちゃんからお年寄りまで、障がいがある人もない人も、みんなが安心して暮らせるまちづくり」を理念に、地域子育て支援拠点や子ども食堂などをやっている。「片平学区で語ろう」というのが名前の由来。片平学区子育て支援ネットワークの事例を紹介する。

このネットワークは、片平学区の保育園、幼稚園、小中学校、訪問看護ステーション、保健センター、区役

所、社会福祉協議会、連絡協議会、民生児童委員協議会、子ども会が集まった、学区独自のネットワークである。子どもたちは学区内で育ち合うので、何かあったときに相談し合える関係づくり、長い期間で支援をしていこうというもの。ただ、最初は、集められた目的もわからず、会長に指名されて戸惑ったが、「こうなったらいいね、片平学区」というグループワークを重ねていく中で、有志で「プレーパーク」をやることが決まった。プレーパークは、子どもが主体となり、自由に遊ぶ、外遊び。専門的な知識もないので、プレーリーダーとしてプレーパークをやっている人に、外遊びの大切さという講座をやってもらい、学びながら関わっていった。2021年度に初めてプレーパークを開催でき、2022年度は3回開催する。名古屋市の民生子ども課が準備から手伝ってくれていたこともあり、2023年度は緑区の事業になり、月1回の開催ができそう。

目的もわからずに始まったところから、プレーパークが緑区の事業になった。いろいろな人々とのつながりの中で助けてもらい、実現できた。プレーパークは、子どもと大人の居場所。地域の中で、子どもと大人が関わり合える関係になるとよい。大人は子どもを見守り、子どもは安心して地域で暮らしていけるとよい。

話題提起②:多文化交流のための地縁団体を交えた話し合い

話題提起者:長尾 晴香氏(一般社団法人 ViVarsity 代表理事)



VIVA(万歳)、岡崎にいてよかったと思える、Diversity、多様性のある地域、社会を目指して、外国人と日本人の楽しいつながりをつくる交流事業をしている。地域ネットワーク会議の事例を紹介する。

小学校の体育館で、外国人と地域住民と一緒に、宿泊避難所防災訓練を行った。それを進めるため、地域ネットワーク会議として、防災関連の団体と、防災に積極的に取り組んでいる自治体に参加してもらい、3回の地域円卓会議を開催した。外国人が何に困っているのか、地域に外国人が来たらどういうことがあるのかを話し合い、お互いのメリットを共有しながら、訓練がイベントで終わらず、今後につながることを意識して会議をした。訓練には、外国人12名、日本人26名が参加。一緒に体験をすると、それまで外国人が好き勝手を言っていると思われていたのが、日本人の当たり前が当たり前じゃなくてもいいという話が自然とできるようになった。地域ネットワーク会議がうまく進められたのは、根回しを丁寧にしたことが大きい。定期的な関わりを持っておき、「あなたがいないと、会議が成立しない」と伝え、絶対に来てほしいと頼んだ。役割も用意し、持っているものを出してもらうようにして、会議や避難訓練を一緒につくっていった。

個人のつながりから、地域とのつながりになると、私たちが地域にやってほしいことをお願いすることになりがちだが、一緒に話をするすることで、地域で困っていることも聞くことができ、それを外国人が手伝ったり、一緒に何かをやってみると、お互いに親近感が湧く。ただ「困っている」と言うだけではなく、会議を重ねること、つながりができる。本当に「VIVA(万歳)」と思えるために、いろいろなところとつながりながら、やっていく。地域の課題、多文化共生、外国人も含めたまちづくりが、愛知県内で取り組まれるとよい。

【第4回の学び ~参加者アンケートを元に~】

- ・「結果、課題解決」。課題を小さいこと・やれることに割り当てる。みんな、課題を課題と思っていない。当事者に切り替わるためのスイッチを入れるには、好きなこと・できることにつなぐ。
- ・地域に承認されるために、アンケートやヒアリングを行う。
- ・固有性が強い事例の再現性は難しい。成功事例の効果を振り返り、知見にしたり、対策を提案することはできるが、そのことに取り組みたいと思う当事者がいないとうまくいかない。再現性・当事者性を高めるには、地域に愛着を持つ人が多くいるか、もしくは、地域を思う人を増やせるかが重要。



第5回 テーマ:連携・協働を阻むもの、それを克服するための担当者の役割

【第1部】

講義:多様な主体による連携・協働のためのコーディネーター論

講師:名畑 恵氏



(NPO法人まちの縁側育み隊 代表理事、錦二丁目エリアマネジメント株式会社 代表取締役)

●錦二丁目、長者町のまちづくり

○地区の概要

名古屋駅とテレビ塔、名古屋城と科学館を結ぶ位置にあり、「名古屋グランドクロス」と呼んでいる。ビジネス中心のまちだったが、植樹や都心居住を進めるなど、変貌している最中。城下町だったので、碁盤割のまちなみは継承。ブロックごとに「会所」と呼ばれる空間がある。また、昭和30～40年代の繊維問屋で、うなぎの寝床状態の3～4階建ての古いビルと新しいビルが混在しており、これから再開発がされていくと、まちがどんどん変化していき、変化していくときに、何を残して、何を新しくしないといけないかに慎重になっておかないと、あっという間に自分たちのまちではなくなってしまう危機感を覚えている。

○錦二丁目エリアマネジメント株式会社

2018年設立。まちの運営をお手伝いする。地域ぐるみで立ち上げた、地域の会社。株主にあたる、一般社団法人まち発展機構の中に、6つの町内会、まちづくり協議会、繊維関係産業の組合が入っていて、地縁組織がすべて入っている。役割は、地域が描いたビジョンを実現する事業部隊であり、経営判断は利益より公益、短期より長期、なりゆき任せではなく、自分たちの暮らしのサービスをよくすることにこだわっている。都市再生推進法人として、公共空間や共有の資産を自分たちで運営している。

○錦二丁目まちづくり構想・錦二丁目未来VISION

錦二丁目まちづくり構想は、地域が中心となって、20年後を見据え、まちの将来の方向性を示す羅針盤。まちの会所という拠点ができ、ワークショップや学習会を何回もやり、つくった。そして、まちづくり構想を実現する話し合いの一方で、6町内会の連合体ができた。1つの町内会ではできないことが、6つの町内会が集まればできることもある。しかし、周りから「連合でやれ」と言われても難しいので、自分たちがやりたいことを元に、「つながればできる」ということを理解してもらい、必然性を当事者たちが感じて行動に移したものだったので、反対意見もなく、構想にも位置付けることができた。

錦二丁目未来VISIONは、まちづくり構想を前提とし、拡張して、外からの応援を集めるためにつくった。多くの関係者と一緒はその時々技術・社会を反映して、これから進める内容を示す活動計画である。大切なのは、コンセプトを持続させることと、状況に応じて更新させること。まちの課題解決が前提で、舞台としてのまち。多様な人の関わりが生まれるように、今ここにはないもので未来のまちをつくる。

●まちづくり計画の事例紹介

○都心移住プロジェクト

若者やクリエイティブな人に、このまちに住んでもらうために、古いビルを改修して、シェアスペースやゲストハウスをつくらうというもの。会議には、ビルのオーナー5人が参加。オーナーとしては、改修費を事

業費に組み込めない。参加者をビルオーナーだけ集めていても、思考停止。パリ帰りの若いダンサーの「若いクリエイティブな人を集めたいのであれば、空間を整備しすぎない方がよい。自分たちで自分たちの基地をつくる感覚がよい」という発言で、状況が変わる。ユーザーになる可能性のある人や多様な人を集めて話し合うと、刺激し合い、活性化する。大切なのは、年齢・役職に関係なく、水平的コミュニケーションができること。コーディネーターはそのための調整役。そうすると、当事者意識が芽生えてくる。

○歩道を拡幅する社会実験

一方通行の道だということがわかりにくく、逆走車が多くて、よく事故が起こる場所がある。市に言っても変わらない。四角い(形式的な)会議だと、議員や市の主要な人物を呼びつけ、怒る。「難しいですね」という感じで終了。まるい(形式ばらない)会議でやると、感情論的な論争を避けることができる。何がネックなのか、行政・警察にとって、何が厳しいのかを見える化した。そして、社会実験として、歩道を拡幅し、効果があれば、行政も変わってくれるのではないかと考え、みんなで汗をかいて、お金を集め、実際に歩道を拡幅した。自分たちでまちのことを考えてきたので、担い手は自分ごとになり、公共空間を使いこなす練習を重ねていることにもなり、こういう動きの中で、まちの担い手が多様になっていった。

■コラム:地域円卓会議のコーディネーターの役どころ

□PPP(プロセス、プログラム、プレイヤー(参加者))をデザインする

- ・まちに関わるときに、まずは、目的に合ったプロセスデザインを考える。
 - 1年、3年、10年、どういう流れをつくっていかうかとやんわり描く。軌道修正も可。
 - 地域の人には地域のことを知っているつもりで知らないことがたくさんあるので、専門家の人たちと一緒にまち歩きをする。まち歩きをしたら、壁新聞にしてまとめる。必ず見えるようにして、発見したものを共有する。そうすることで、話し合いの成果を共有でき、全体に伝わったのかの確認ができる。まちの人にとっては当たり前過ぎたことを、外の人に褒められると、認められる。
- ・プログラムデザインも大切。1回1回をどう過ごすかを考える。
- ・参加者デザイン。多様な人がいればいるほど、発想が刺激されていく。
 - そういう場を心掛けて、ケンカを恐れない。水平的なコミュニケーションができるように、調整する。

□まるい会議をひらく

・「プロセス、プログラム、プレイヤー(参加者)」、3つのPでまるい会議。

- ①目的の共有と重点目標で、小さな達成感を積み上げる。
- ②問いのデザインが要。問いをどうやって問いかけるか。
- ③創造的な会議の流れは、開く→仕分ける→まとめる。

・まるい会議は、動きを起こすために行う。まるい会議は、多様な仲間が増える。



□ファシリテーションを心がける

- ①各人の意見が全体に伝わったか確認できる
- ②話し合いの成果を共有できる
- ③話し合いや発想を刺激し活性化する
- ④水平的コミュニケーションができる
- ⑤当事者意識が芽生える
- ⑥感情論的な論争を避けることができる
- ⑦話し合いの流れが見える(論点を明確)にできる

(一般財団法人世田谷トラストまちづくり「参加のデザイン道工具箱」より)

【第2部】

地域円卓会議 実践編

テーマ:連携・協働を阻むもの、それを克服するための担当者の役割

ファシリテーター:池田 哲也氏(一般社団法人地域問題研究所 事業部長)



研修の最後に、上記のテーマで、地域円卓会議を二重円卓方式で実践した。二重円卓とは、中央の円卓だけで話し合うのではなく、途中で周囲の人と話し合う時間(サブセッション)を設ける方式である。サブセッションでは、参加者が、連携・協働のために多様な主体と会議を開催する際の悩み・困りごとを、①組織・立場、②NPO・地縁団体、③参加者・コミュニケーションの3つのグループに分けて、話し合った。

①組織・立場

悩み	行政・NPO・市民で、連携・協働に対する誤解あり／組織内での縦割り／事業化と終わり方
議題	連携・協働の「丸投げ問題」。行政はお金を出すだけ、NPOは委託業者。対等な関係とは。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・そもそも<u>目的の共有</u>がきちんとできていない。 ・こうあるべきという<u>会議の先入観を壊すには</u>、足で稼いだり、根回ししたり、<u>インフォーマルな(形式ばらない)ことが大切</u>。 ・<u>「ぶっちゃけ、どうですか?」</u>と聞くと、腹を割って話してくれる。



②NPO・地縁団体

悩み	地域から聞く困りごとは、協働につながらない／NPOと地縁団体も、協働するのは難しい
議題	NPOと地縁団体、どう上手にやっていくか。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・地縁団体に課題を聞いても出ないので、<u>やりたいことを引き出す</u>。 ・NPOは、活動の理念に合わない動いてもらうのが難しいので、<u>どう特性を生かしていくか</u>が大切。 ・<u>相手によって伝え方を変える</u>ことで、よりよい参加につながる。



③参加者・コミュニケーション

悩み	いつものメンバーしか集まらない／声の大きい人に流される／参加者のお客さん化
議題	参加者の人選やよいコミュニケーションは、そもそもどうやっているのか。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>人選には根回し</u>が重要。 ・<u>重点目標</u>を設定。ただ、押し付け合いにならないよう、<u>割り振り</u>を。 ・新しい人をどうつなげるか。<u>いつでもWelcomeな姿勢</u>が大切。 ・大学を連携・協働の相手として、使ってほしい。<u>まずは、つながりを</u>。



【第5回の学び ～参加者アンケートを元に～】

- ・「まるい会議」と「PPP(プロセスデザイン、プログラムデザイン、プレイヤー(参加者)デザイン)」。
- ・人が育つことで、地域が育つ。何をやるかより、誰とやるかが、地域にとっては大切。
- ・人集めは、渡す相手によって、デザインされたチラシや、Wordでつくった文書などを使い分ける。
- ・「お誘い三度の法則」。一度誘って断られても、三度誘ったら、来てくれる。一度の声かけて、あきらめない。

IV まとめ

本研修では、連携・協働のための地域円卓会議を企画するノウハウやポイントを学ぶとともに、研修の参加者が過去に開催した会議の経験や、理想の地域円卓会議を設計・進行管理をする上で、壁やネックになっていることを乗り越えるアイデアを、講義や話題提起の内容を参考にしながら考え、整理した。地域円卓会議の流れ(3ページ参照)に沿って、壁やネックになっていることと、乗り越えるアイデアを紹介する。

地域の課題・希望

壁①：地域の方は、課題を課題とっていない。地域の課題を聞いても、連携・協働に結びつかない。

・全住民アンケート

→アンケートで課題を見える化し、共感を得る。そうすることで、まちづくりのオーソライズ(承認)になる。

・やりたいこと

→課題・困りごとを聞くのではなく、やりたいことを聞く。楽しいこと・できることで、間口を広げる。

・課題の切り分け

→課題が大きいと何から始めればよいかかわからないが、課題を小さく切り分けることで、できることが見えてきたり、できる人が現れたりする。

連携・協働のニーズ

壁②：立場(行政・NPO・大学・企業)によって、連携・協働の考え方(パートナー?下請け?)が違う。

・win-winの関係とリスペクト

→対等な関係であることが前提で、誰かだけにとってのよいことではなく、すべての参加者にとってのメリットがなくてはならない。そして、お互いにリスペクトがあれば、よい事業になる。

壁③：連携・協働の効果がわからない。連携・協働に対する、温度差や警戒心(仕事が増える?)がある。

・集合知を生み出す

→一人の考えや専門家が集まって出した回答より、多様な主体が集まって、導き出した考えの方が正しい。多様な主体が一緒に何かをすることで、事業の質や量が向上する効果がある。

・一緒にやってみる

→連携・協働を、実際にやってみないとわからないというものはある。一緒にやってみるのが、一番の近道。岡崎や錦二丁目の事例からも、つながればできることを当事者が理解すると、できることが増える。

準備・企画

壁④：人選が難しい。地域の人材がわからない。いつものメンバーしか集まらない。

・何をやるかよりも、誰とやるか

→この参加者だからこそ得られる結果があり、地域にはそれが大切。仲間を広げることが動きを起こす。

・多様な主体やユーザーになる可能性のある人を誘う

→関係者や専門家ばかりでは、議論や思考が止まってしまう。多様な主体や将来ユーザーになる可能性のある人を集める(弱いつながり)ことで、刺激し合い、話し合いが活性化される。

・情報のアンテナを敏感に

→気にしておくのと、いろいろなところにつながってくる。気になる人とは、定期的にコンタクトを取っておく。

壁⑤: 会議に参加してもらうにはどうしたらいいか。参加者のメリットもなくてはならない。

・根回しが大切

→「あなたがいないと会議が成立しない。絶対に来てほしい」と頼み、事前に役割を明確に伝えておく。

・相手によって誘い方を変える

→チラシやWordの文書などを使い分ける。例えば、町内会へのお知らせは、Wordの文書が効果あり。

複数回の会議

壁⑥: 声の大きい人の意見に流される。私の意見は違うと思っても、黙っている人がいるかも。

・フラットな関係・水平的コミュニケーション

→多様な主体が集まっているだけでは不十分で、一人に権威性が帯びてはいけない。そして、年齢・役職に関係なく、水平的コミュニケーションができること、話し合いが活性化する。

・会議後のフォロー

→会議後に、会議で言えなかったことを連絡してくる人は多く、その人の話を丁寧に聞く。また、会議中に話せていない人に対して、事務局からフォローを入れることも大切である。

壁⑦: こじれない程度に本音でぶつかり合い、一緒にゴールに向かっていくための関係の構築が難しい。

・「ぶっちゃけ、どうですか？」

→腹を割って話してくれそうなフレーズ。どのように問いかけるかが、本音を引き出すためには重要。

・「困っているんだけど、手伝ってくれない？」

→頼みごとや貸し借りのできる関係を築く。ただし、客観性が保てなくなるので、深入りし過ぎない。

・弱いつながりから強いつながりへ

→よいアイデアを出すためには弱いつながりが有効であるが、アイデアを実行に移すためには強いつながりが必要である。強いつながりへの移行には、会議を重ねたり、根回しするなどの工程が必須。

壁⑧: 参加者がお客さん化してしまう。地域の担い手として、当事者意識を持ってもらうにはどうするか。

・テーマを編集する

→多様な主体が参加しやすく、メリットのある話し合いができたり、ワクワクできる言い方に再編集する。

・役割をつくる

→役割ができると人は輝く。何もしなくてよいとおもてなしするスタイルだと、逆に人は居心地が悪い。

・優先順位を上げる

→地域課題の解決は、アイデアがあり、やった方がよいとわかっている、リソース(資源)がないと、なかなか人は動かない。自己実現や仕事と絡めてやらないと、実働につながっていかない。

ゴール(成果)

壁⑨: やって終わりではなく、続けていくのが難しい。

・しくみ化

→必要な限り継続していけるように、しくみ化を目指す。脱「属人(その人だけ)」・脱「単年(その年だけ)」で地域の持続可能性と、目指す社会の実現のため、どのくらいの事業規模が最適かを考える。

・柔軟性

→コンセプトは持続させつつ、状況に応じて更新する。「そっち方がいいね」という価値観で変えていく。



発行 2023年3月

愛知県 県民文化局 県民生活部 社会活動推進課
愛知県名古屋市東区上堅杉町1ウィルあいち2階
あいちNPO交流プラザ
TEL 052-961-8100 FAX 052-961-2315
E-mail npo-plaza@pref.aichi.lg.jp

編集 あいち協働事業サポートセンター

構成団体 特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ
特定非営利活動法人地域福祉サポートちた
特定非営利活動法人ボラみみより情報局